

女子中高生における社会適応力を獲得するための体育授業の在り方の検討

HAYASHI, Sonoko / 林, 園子

(出版者 / Publisher)

法政大学スポーツ健康学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学スポーツ健康学研究 / 法政大学スポーツ健康学研究

(巻 / Volume)

5

(開始ページ / Start Page)

41

(終了ページ / End Page)

50

(発行年 / Year)

2014-03-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00009699>

女子中高生における社会適応力を獲得するための体育授業の在り方の検討

A Study on The State of Physical Education Class for Acquiring The Social Adaptation Power in Woman Junior and Senior High School Student

林 園子¹⁾

Sonoko Hayashi

[要旨]

本研究では、女子中高生における現在の社会適応力と体育授業における人間関係について検討し、体育授業を通して女子中高生が社会（学校）生活に適応できる力を身につけるための効果的な体育授業を追究することを目的とした。結果、女子中高生における「社会適応力」の実態及び「体育授業における人間関係」の状況が明らかとなった。また、「社会適応力」を獲得するために必要な体育授業の展開方法のポイントが示唆された。今後は、本研究で得られた結果をもとに、「社会適応力」を獲得するための実践的な体育授業の取組み方法、具体的な授業内容を明確にすることが必要であるとともに、他に挙げた「社会適応力」を身につけるための体育授業の在り方について追究することが必要になると考える。

key words: Social Adaptation ,Physical Education, Human Relations

キーワード：社会適応力，体育授業，人間関係

1. 研究の目的

近年、中高生は教師や友人などの人間関係、社会的秩序、進路、部活動や学校行事、普段の授業における学習態度など学校生活の様々な面における適応力不足の指摘が言われており、今もなお大きな社会問題として挙げられている。

小学校高学年から始まる「思春期」は、親や教師、周りの人々を通して、社会的態度について学び、素直にその教えを受け入れて成長する時期とは異なり、それらを踏まえ自分で答えを選択していくのみならず、自分の特性について考え始め、「自分とは何か」「これから自分はどうかあるべきであるか」を自分の力で探求し始める時期である。しかし、そこには先にも挙げたとおり、目の前に現れる人間関係、学習面、将来や社会などへの課題を解決して「自分」という個を確立していかなければならない。今までは親や教師が答えを導い

てくれたが、これからは自分で解決をしていかねばならない。その解決をしていくためにこの時期、「他人は自分のことをどのように思っているのか」「自分を認めてもらいたい」と他者からの自分の評価を気にするようになり、一般的に言われる「よい子」になろうとする者が多い。人に自分を認めてもらおうと努力をするために、日に日にありのままの自分を隠し、多忙感、不安、悩み、ストレスなどが重なり適応力不足となってしまっている者も少なくはない。

石津（2007）²⁾は、思春期（青年期前期）の者は「環境からの要求や期待に個人が完全に近い形で従おうとすること。内的な欲求を無理に抑圧してでも外的な期待や要求に努力をすることが多い。」としており、これを「行き過ぎた適応」としている。さらに、これらの「行き過ぎた適応者」の増加が今日の学校生活に対する適応力欠陥の根

1) 法政大学スポーツ健康学部

本的原因であると考えられる。

また、傳田(2004)⁹⁾は、小学校一年生から中学校三年生を対象に「気分に関する調査」を行った結果、「何をしても楽しくない」「やろうと思ったことがうまくできない」「泣きたいような気がする」「生きていても仕方がない」などマイナスな気分の項目において、女子が男子より優位に高く、学年が上がるに連れてより高いという結果を示している。さらに、石津(2008)³⁾の思春期を対象とした青年期前期用過剰適応尺度(「自己抑制」「自己不全感」「他者配慮」「期待に添う努力」「人から思われたい欲求」)の全尺度のマイナス項目において女子が男子よりも有意に高い値を示し、女子における過剰適応を指摘している。

これらの状況を通して栗谷ら(2009)¹⁾は、「思春期の子どもたちの心理的な援助の必要性は多岐に亘っている。彼らの気持ちの根底を支えるものは何であろうかと考えると、自分自身を信じられる力、すなわち自分は自分らしくあって良い。自分の行動や決定をそれで良いと認め、家族や友人などの人を信じられる力が非常に重要であろう。」と人との信頼関係の必要性を述べている。とくに学校生活においては、教師や友人との関係が重要になるであろう。学校では、この信頼関係をつくる機会のひとつに身近な教科として体育の授業はとて有効的であると考えられる。

中学校学習指導要領(2010)²¹⁾の体育分野の目標の一文に、「運動の合理的な実践を通して、運動の楽しさや喜びを味わうことができるようにする。」とあり、これは高等学校においても同様の一文である。この楽しさの具体的な内容として人に勝つ、協力する、物事を達成する、克服する、模倣する、表現することであるとしている。これらの内容は、まさに今の学校適応力不足にも重なる。これらの楽しさを体育授業で触れ、「できた。分かった。」と自分自身で感じたとき、喜びとなり得るであろう。その楽しさを感じることができきっかけが体育教師や体育授業で共に関わる仲間の存在であろう。とくに体育教師について杉山ら(2010)⁷⁾は、運動の苦手な生徒や閉じこもりな生

徒など様々な生徒がいる中で、一人ひとりを大切に、運動の楽しさや喜びを味わわせながら保健体育科として身につけさせたい事柄をしっかりと身につけさせることである」と述べており、清水(2011)⁵⁾は、体育授業において体育教師が一人ひとりの子どもをよく理解し支えていくことで、それぞれの子どもにとっての伸びを楽しさの中で保証していかなければならないという「子どもを中心とした授業」と、どのように運動することが上手に運動することなのか客観的な事実から追究し、それを集団(仲間)で見合い確かめ合いながら理解・習得させていかなければならないという「運動のもつ合理性や文化性を仲間を通して学ぶ授業」といった『教師対生徒』『生徒対生徒』の関係の重要性を述べている。

とくに女子の特性において清水(2009)⁴⁾は「友達と仲良く楽しくする体育を望んでいる」林(2001)¹⁰⁾においても「体育教師や仲間とのコミュニケーションを大切にすることを望んでいる」としている。すなわち、体育教師や仲間との関係を大切にすることを体育授業は女子中高生の現状問題を解決するための鍵となると言えるであろう。

本研究では、女子中高生に焦点を当て、学校生活の現状問題を踏まえ、現在の適応力の実態と体育授業における体育教師及び仲間との関係について検討し、体育授業を通して女子中高生が学校のみならず社会生活に適応できる力を身につけるための効果的な体育授業を追究することを目的とした。

2. 研究の方法

2.1 調査実施及び調査方法

本研究の調査は、東京都、埼玉県に所在する中学校及び高等学校3校全学年650名を対象に実施した。調査期間は2013年6月～7月であった。主な調査内容は「中高生の社会適応力」は石津(2007)²⁾の青年期前期用過剰適応尺度の自己抑制、自己不全感、他者配慮、期待に添う努力、人から思われたい欲求の5項目をもとに、各項目ひとつずつ(人と競争することが好き、何事にも向上心

がある、友人関係がうまくいっている、いい成績をとりたいと頑張っている、人からよく思われたい」とポジティブな質問項目とした。また、「体育授業における人間関係の満足度」は、「体育教師」及び「仲間（友人）」から11項目を設定した。中学生389名、高校生256名、有効回答数は645名（99.2%）であった。これらの調査内容から女子中高生の「社会適応力」と「体育授業における人間関係の満足度」の実態との関係を明らかにするために、アンケート調査で収集されたデータから中高生の基本的特性、スポーツ特性、運動・スポーツ活動状況を中心に必要に応じて χ^2 検定を用いた。

3. 結果と考察

3.1 女子中高校生の運動・スポーツ活動に対する諸特性

3.1.1 運動・スポーツ活動及び意識

Table 1 は、現在の女子中高校生における運動・スポーツ活動及び意識状況を示している。部活動（運動部）の所属率において、中学校93.8%（n=365）、高校64.8%（n=166）が「所属している」回答であり、中学校が圧倒的に多い結果を示

した。学外でのスポーツ活動率において、中学校84.7%（n=340）、高校98.0%（n=251）が、「行っていない」回答であり、校種関係なく高い割合で行っておらず、高校においてはほぼ全員が行っていない結果を示した。また、体育授業において、中学校74.6%（n=290）、高校76.6%（n=196）と校種問わず7割以上の生徒が「好き」の回答を示した。

Table 2 は、日常生活における運動・スポーツとの関わりを示している。この項目の中で「スポーツ番組を観る」において、中学は「観る」35.2%（n=137）、「観ない」40.1%（n=156）、高校は「観る」45.3%（n=116）、「観ない」33.6%（n=86）であり、高校生がわずかながら観ることに興味を持っている結果を示した。また、「体を動かすこと」において、中学校60.9%（n=237）、高校64.1%（n=164）と校種問わず6割以上の生徒が「好き」の回答を示した。

これらの結果により、運動部への加入率状況は大変に多く、体育授業、体を動かすことへの意識も高いことから、自分の身体で運動・スポーツをすることへの意欲関心は高い生徒であるといえる。

Table1 運動・スポーツ活動及び意識

	中学 N=389				高校 N=256				不明		χ^2 検定		
	はい		いいえ		はい		いいえ		n	%	χ^2	DF	P
	n	%	n	%	n	%	n	%					
部活動に所属している	365	93.8	21	5.4	166	64.8	89	34.8	4	0.62	97.328	2	***
学校外でスポーツを行っている	48	12.3	340	87.4	5	2.0	251	98.0	1	0.16	22.836	2	***
体育の授業が好き	290	74.6	99	25.4	196	76.6	60	23.4	0	0.00	0.337	1	n.s

Table2 日常生活における運動・スポーツへの関わり

	中学 N=389						高校 N=256						χ^2 検定		
	はい		ふつう		いいえ		はい		ふつう		いいえ		χ^2	DF	P
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%			
体を動かすことが好き	237	60.9	93	23.9	59	15.2	164	64.1	56	21.9	36	14.0	13.435	5	n.s
体育の授業が好き	290	74.6	0	0.00	99	25.4	196	76.6	0	0.00	60	23.4	0.337	1	n.s
スポーツ番組を観る	137	35.2	96	24.7	156	40.1	116	45.3	54	21.1	86	33.6	12.877	5	*
スポーツに関する雑誌・新聞を読む	49	12.6	68	17.5	272	69.9	30	11.7	44	17.2	182	71.1	8.454	5	n.s
スポーツ観戦に行く	60	15.4	71	18.3	258	66.3	50	19.5	41	16.0	165	64.5	7.302	5	n.s

3.1.2 体育授業における種目の好き嫌い

Figure 1は、生徒が感じている体育授業における種目の好き嫌いの結果を示したものである。なお、好き嫌いの種目はそれぞれひとつずつの回答を得た。

好きの種目において、中学校では、238名中最も多かった種目は、陸上競技29.4% (n=70)、次にバスケットボール14.7% (n=35)、バレーボール10.1% (n=24)であった。高校では、171名中最も多かったのはバスケットボール21.1% (n=36)、バドミントン11.1% (n=19)であった。

嫌いな種目において、中学では、271名中最も多かった種目は、器械運動36.5% (n=99)、次に陸上競技21.0% (n=57)、水泳15.9% (n=43)で

あった。高校では、174名中最も多かった種目は、器械運動43.7% (n=76)、次にバスケットボール12.6% (n=22)、バレーボール10.9% (n=19)であった。

これらの結果から、全体を通して球技全般を好む者が多く、器械運動が最も苦手とする者が多い結果となった。中学校において陸上競技において好き嫌いの二極化の傾向がみられた。今回、高校において水泳の授業を行っている学校がなかったため、高校における水泳の好き嫌いの回答を得ることが出来なかったが、仲間と関わりながら行う種目が好まれ、個人で記録が求められたり、技を披露しなければならぬ種目を苦手とする者が多い傾向を示した。

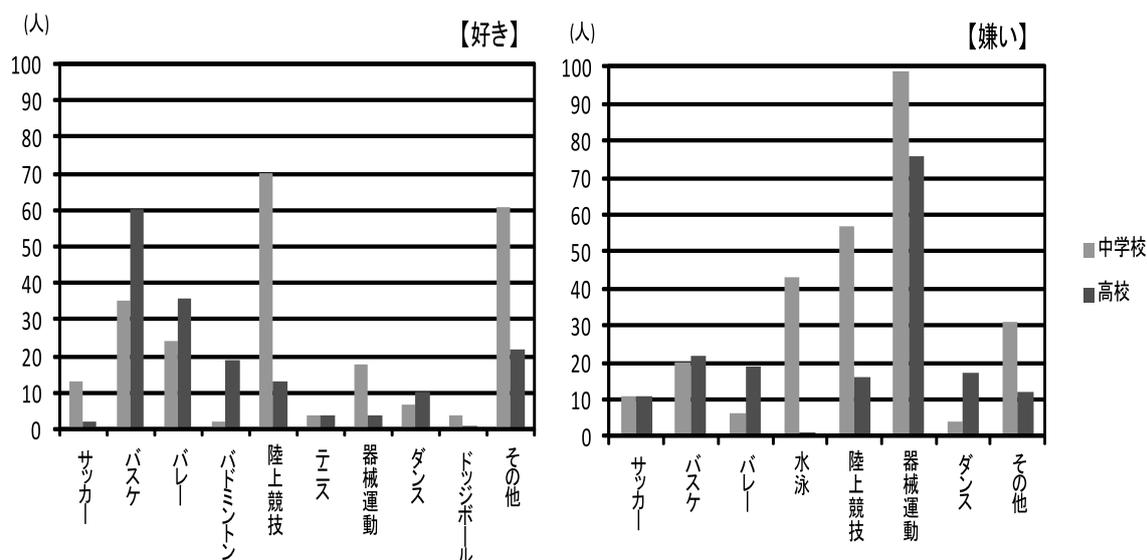


Figure1 体育授業における種目の好き嫌い

Table3 社会適応力状況

	中学 N=389						高校 N=256						χ^2 検定		
	はい		ふつう		いいえ		はい		ふつう		いいえ		χ^2	DF	P
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%			
いい成績を取りたいと頑張っている	353	90.7	28	7.2	8	2.1	216	84.4	25	9.8	15	5.9	11.578	5	*
人からよく思われたい	254	65.3	115	29.6	20	5.1	156	60.9	84	32.8	16	6.3	11.638	5	n.s
友人関係がうまくいっている	286	73.5	88	22.6	15	3.9	196	76.6	51	19.9	9	3.5	8.324	5	n.s
人と競争することが好き	210	54.0	150	38.6	29	7.5	168	65.6	72	28.1	16	6.3	11.691	5	*
何事にも向上心がある	180	46.3	119	30.6	90	23.1	87	34.0	103	40.2	66	25.8	15.151	5	**

3.2 社会適応状況と体育授業における満足度

3.2.1 女子中高生の社会適応状況

Table 3 は、女子中高生における社会適応力状況を示している。「いい成績を取る」において、中学校90.7% (n=353)、高校84.4% (n=216) が「頑張っている」回答であり、中高生共にとても意欲的であり、特に中学生の方が多く結果を示した。「人との競争」において、中学生54.0% (n=210)、高校65.6% (n=168) が「好き」の回答であり、高校生の方が多く結果を示した。「向上心」において、中学46.3% (n=180)、高校34.0% (n=87) が「ある」の回答であり、中高生共に5割を下回っているが、やや中学生が多い結果を示した。

これらの結果により、他の項目も含め全体的には向上心以外の項目において高い意識を持って日常生活を送っている傾向があると伺える。

3.2.2 体育授業における人間関係の満足度

Table 4 は、「体育授業における満足度」10項目を5段階評価で回答した結果の平均値を示したものである。

全体において高い値(4.00以上)の大項目は「運動がうまく出来ることは格好いい」(4.39)、次に高い値は(3.55~3.99)において「授業中、仲間と教えあう」(3.83)「体育の授業で達成感を感じたことがある」(3.77)「授業中、仲間を励ますことができる」(3.67)「授業中、先生の目を気にせず

ず取り組むことが出来る」(3.60)「体育の先生の説明は分かりやすい」(3.59)「授業中、仲間から励ましをもらう」(3.56)の6項目であった。また、低い値(2.99以下)の項目は「体育の先生を信頼している」(2.95)であった。

これらの結果から、生徒は体育授業における満足度に対して、運動・スポーツが出来る格好良さなど人から自分がどのように見られているか「見た目の良さ」を求めている傾向にある。また、仲間と共に教えあったり励ましあったりと授業で行う上で仲間との関係が良好であると言える。しかしながら、その「見た目」の良さなどを最終的に生徒を評価する体育教師との関係がうまくいっていないことが伺える。

次に、校種別においてF検定の結果より有意差がみられ、中学校と高校のそれぞれに特徴を示す結果となった。

「授業中、仲間を励ますことができる」は中学校(3.53)、高校(3.90)において高校が高い値を示した。一方で「体育の先生を信頼している」が中学校(2.98)、高校(2.45)と高校が低い値を示した。Table 3の結果より、中高生は良い成績を取るために意欲的に体育授業に取り組む姿勢が伺えるが、実際に、体育教師との信頼関係が希薄であることから、やる気が失せないためにも体育教師はあらゆる角度から生徒一人ひとりが精一杯授業に取り組む姿勢の努力を評価するような方法を考

Table4 体育授業における人間関係の満足度

質問項目	中学		高校		全体		F値	P
	M	SD	M	SD	M	SD		
授業中、友達のを気にせず取り組むことができる	3.28	1.003	3.49	.973	3.36	.996	.893	n.s
運動がうまく出来ることは格好いい	4.36	.867	4.44	.777	4.39	.833	1.759	n.s
授業中、先生の目を気にせずに取り組むことができる	3.49	.933	3.77	.886	3.60	.924	4.478	*
授業中、仲間と教えあう	3.79	1.020	3.89	.843	3.83	1.322	.255	n.s
体育の先生を信頼している	2.98	1.366	2.89	1.253	2.95	.954	5.747	*
どんな体育の先生でも授業を楽しむことができる	3.34	1.114	3.15	1.123	3.27	1.121	3.518	n.s
体育の先生の説明は分かりやすい	3.68	1.018	3.45	.938	3.59	.993	1.844	n.s
体育の授業で達成感を感じたことがある	3.78	1.022	3.75	.975	3.77	1.003	.980	n.s
授業中、仲間を励ますことができる	3.53	1.393	3.90	1.312	3.67	1.372	13.038	***
授業中、仲間から励ましをもらう	3.47	1.391	3.70	1.368	3.56	1.385	1.448	n.s

4.00以上
3.50~3.99
2.99以下

慮しなければならないと考える。とくに、高校生では「体育教師との信頼をしていない」や「授業中、先生の目を気にせずに取り組むことができる」(3.77) から、体育授業は体育教師との信頼関係なく勝手に楽しんでしまっている単なる遊びの場と化す傾向が伺え、一時間一時間の授業で必ず掲げている本来の「ねらい」に沿った内容が実際の授業において進められているのか疑われる。体育教師は、子どもを主体とした授業を提供するためにも教師と生徒との友好的な関係を築かねばならないと考える。

3.3 「社会適応力」と「体育授業における人間関係の満足度」の因果関係

3.3.1 「体育授業への意識」と「社会適応力」の関係

Table 5 and 6 は、体育授業の好き嫌い和社会適応力 5 項目の関係を校種別にクロス集計した結果である。有意差がみられた社会的適応力は 2 項目であった。

社会適応力の項目「人と競争することが好き」と体育授業の好き嫌いにおいて、「競争することが好き」という者の中で「体育授業が好き」の者が最も多く、中学校61.0% (n=177)、高校71.9% (n=141) であった。また「体育授業が嫌い」の者は、中学校33.3% (n=33)、高校45.0% (n=27)

であった。一方、「競争することは嫌い」という者の中で「体育授業が好き」の者は、中学校5.2% (n=15)、高校4.1% (n=8)、「体育授業が嫌い」の者は、中学校14.1% (n=14)、高校13.3% (n=8) であった。

また、社会適応力の項目「何事にも向上心がある」と体育授業の好き嫌いにおいて、「向上心がある」という者の中で「体育授業が好き」の者が最も多く、中学校57.6% (n=167)、高校41.8% (n=82) であった。また、「体育授業が嫌い」の者は、中学校13.1% (n=13)、高校8.3% (n=5) であった。一方、「向上心がない」という者の中で、「体育授業が好き」とする者は、中学校13.1% (n=38)、高校14.8% (n=29) であった。また、「体育授業が嫌い」とする者は、中学校52.5% (n=52)、高校61.7% (n=37) であった。

これらの結果から、「人と競争することが好き」は校種別、体育授業への意識関係なく日常生活のどのような環境においても意識が高い生活を送っていると言える。一方、「何事にも向上心がある」は校種問わず、体育授業への意識が向上心の意識に関与していることから、体育授業の楽しさ喜びを味わうことは社会に対する向上心を育くむためにも重要な意味を持つのではないかと考える。

Table5 「体育授業への意識」と社会適応力：「人と競争することが好き」との関係

	体育好き				体育嫌い				全体		χ^2 検定
	N=290		N=99		N=389		N=196		N=256		
中学	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	
競争好き	177	61.0	33	33.3	210	54.0	141	71.9	168	65.6	$\chi^2=25.171$
どちらでもない	98	33.8	52	52.5	150	38.6	47	24.0	72	28.1	DF=2
競争嫌い	15	5.2	14	14.1	29	7.5	8	4.1	16	6.3	***

Table6 「体育授業への意識」と社会適応力：「何事にも向上心がある」との関係

	体育好き				体育嫌い				全体		χ^2 検定
	N=290		N=99		N=389		N=196		N=256		
中学	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	
向上心有	167	57.6	13	13.1	180	46.3	82	41.8	87	34.0	$\chi^2=81.107$
どちらでもない	85	29.3	34	34.3	119	30.6	85	43.4	103	40.2	DF=2
向上心無	38	13.1	52	52.5	90	23.1	29	14.8	66	25.8	***

3.3.2 「社会適応力」と「体育授業における人間関係の満足度」の規定関係

Figure 2 , Figure 3 , Figure 4 は、「社会的適応力」と「体育授業における人間関係の満足度」の関係性をより確実に検討をすることから、女子中高生における「社会的適応力」を規定する「体育授業における人間関係の満足度」を明らかにするためにTable 6 で示す体育授業の好き嫌いの意識の違いが向上心の有無に關与していた社会適応力の項目である「何事にも向上心がある」を目的変数とし、「体育授業における人間関係の満足度」10項

目を説明変数として重回帰分析を行った。係数が正の場合、説明変数に対する評価が高いほど「向上心がある」と感じる傾向が高く、評価が低いほど「向上心がない」と感じる傾向が解釈をした。分散比は0.1%、1%、5%と各水準で有意差があり、規定関係を持つことを示している。

Figure 2 では、全体を通して体育授業において「授業中、友達を目を気にせず取り組むことができる」「体育の先生は信頼できる」(共に $P<0.001$)、「体育の授業で達成感を感じたことがある」($P<0.01$)の意識が高いほど「何事にも向上心が

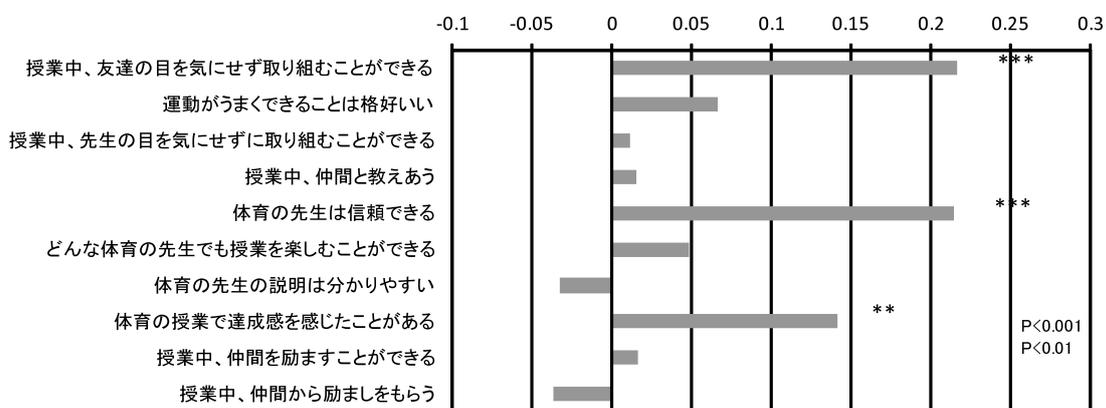


Figure2 社会適応力：「何事にも向上心がある」と「体育授業における人間関係の満足度」の規定関係【全体】

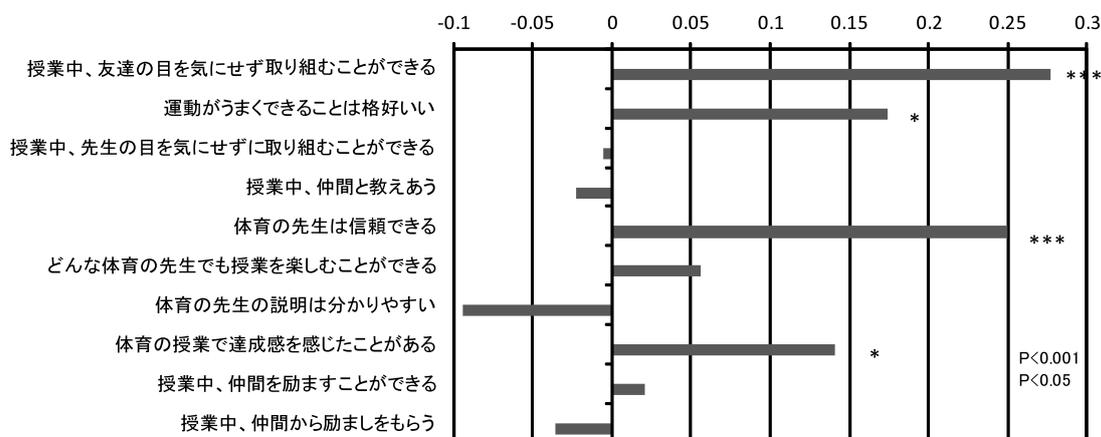


Figure3 社会適応力：「何事にも向上心がある」と「体育授業における人間関係の満足度」の規定関係【中学校】

ある」と感じる傾向がみられた。これらの結果が

「授業中、先生の目を気にせず取り組むことができる」と「体育の授業で達成感を感じ

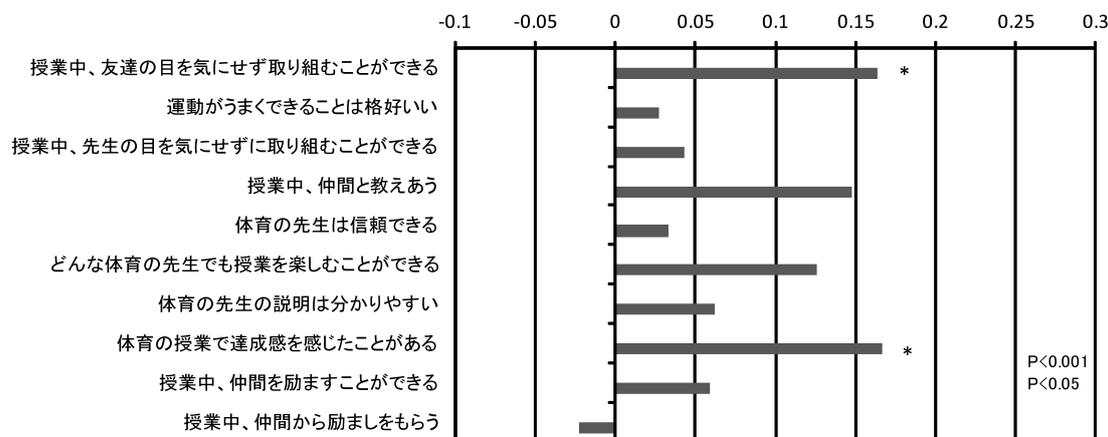


Figure4 社会適応力：「何事にも向上心がある」と「体育授業における人間関係の満足度」の規定関係【高校】

ら、日常生活において、どのようなものに対しても向上心持ち、意欲的に生活を送ることができるよう態度を身につけることができるための効果的な体育授業には特にこの3要素を取り入れた授業展開が重要であるのではないかといえる。

Figure 3 and Figure 4 は、社会適応力項目「何事にも向上心がある」に関する規定要員を比較したものを校種別に示したものである。

中高共通する規定要因は「授業中、先生の目を気にせず取り組むことができる」(中学校P<0.001、高校P<0.05)、「体育の授業で達成感を感じたことがある」(中学校及び高校共にP<0.05)が体育授業において充実すると「何事にも向上心がある」と意識が高まる傾向がみられた。

また、中学校にみられる特徴的な規定力はFigure 2の結果に加えて、「運動がうまくできることは格好いい」(P<0.05)であった。中学生は体育授業を通して、特に確実な技能の獲得できたという自信や体育教師との信頼関係が社会適応力(特に向上心を高める)を身につけるために重要な役割を果たしているといえる。

高校にみられる特徴的な規定要因はFigure 2の結果の2項目「授業中、先生の目を気にせず取り

じたことがある」であった。

4. 結論

本研究では、女子中高生における現在の社会適応力と体育授業における人間関係について検討し、体育授業を通して女子中高生が社会(学校)生活に適應できる力を身につけるための効果的な体育授業を追究することを目的とした。結果は以下のように要約される。

1. 女子中高生における「社会適応力」の実態及び「体育授業における人間関係」の状況が明らかとなった。
2. 「社会適応力」を獲得するために必要な体育授業の展開方法のポイントが示唆された。すなわち、今回の結果より特に「向上心を持つ力」を身につけるために体育授業の好き嫌いという意識が関与しており、体育授業における仲間や教師との友好的な関係が「向上心を持つ力」を高める重要な役割を担っていることが明らかとなった。これらのことから、現在の学校生活だけでなく、将来、社会に出て、遭遇するあらゆる物事に対して、向上心を持ち、意欲的な日常生活

を送ることができる態度を身につけることができるための効果的な授業展開をするための方法が示唆された。

今後は、本研究で得られた結果をもとに、「社会適応力」を獲得するための実践的な体育授業の取り組み方法、具体的な授業内容を明確にすることが必要であるとともに、他に挙げた「社会適応力」を身につけるための体育授業の在り方について追究することが必要になると考える。

参考文献

- 1) 栗谷初子, 本間友巳: 思春期の自己肯定感のあり方に影響を及ぼす要因について—学校生活適応感, 生活習慣との関係を中心に—, 京都教育大学教育実践研究紀要, 第10号, P193-202
- 2) 石津憲一郎, 安保英勇: 中学生の抑うつ傾向と過剰適応, 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 第55集, 第2号, P271-288, 2007
- 3) 石津憲一郎, 安保英勇: 中学生の過剰適応傾向が学校適応感とストレス反応に与える影響, 教育心理学研究, Vol56, P23-31, 2008
- 4) 清水康太: 体育授業における生徒の学習目標に対する意識とその実施状況に関する検討, 愛知教育大学保健体育講座研究紀要, No.34, P39-42, 2009
- 5) 清水由: シンプルで子どもが伸びる体育の授業づくり, P30, 2011, 明治図書
- 6) 浜崎隆司, 田村隆宏, 吉田和樹, 吉田美奈, 岡本かおり, 安藤ときわ, 倉成正宗: 親子の信頼関係尺度に関する予備的研究, 鳴門教育大学研究紀要, 第27巻, P25-31, 2012
- 7) 杉山重利, 佐藤豊, 園山和夫: めざそう! 保健体育教師, P57-67, 朝日出版社2010
- 8) 傳田健三, 佐々木幸哉, 朝倉聡, 北川信樹, 小川司: 児童・青年期の気分障害に関する臨床的研究, 児童青年精神医学とその近接領域, Vol42, P277-302, 2001
- 9) 傳田健三, 加古勇樹, 佐々木幸哉, 伊藤耕一, 北川信樹, 小川司: 小・中学生の抑うつ状態に関する調査—Birlson自己記入式抑うつ評価尺度 (DSRS-C) を用いて—児童青年精神医学とその近接領域, Vol45, P424-436, 2004
- 10) 林園子: 学校体育の授業における「関わり合い」の構造と機能に関する研究, 平成13年度日本女子体育大学大学院修士論文, 2001
- 11) 林園子, 畑攻, 前田佳奈, 他: 子どものスポーツのサービス内容とマネジメント (1) —子どものスタイルと運動習熟状況からの検討—, 日本体育学会第59回大会予稿集, p.164, 2008.
- 12) 林園子, 畑攻, 前田佳奈, 他: 子どもの基礎基本運動の習熟状況とマネジメントの検討, 日本体育学会第60回大会予稿集, p.165, 2009.
- 13) 林園子, 畑攻, 池田延行, 他: 小学校における体力の向上及び運動習慣の形成と基礎基本運動の習熟に関する研究, 日本女子体育大学紀要, 第39巻, p.35-45, 2009.
- 14) 林園子, 畑攻, 池田延行, 他: 小学校における基礎基本運動の習熟状況とスポーツ特性に関する研究, 日本女子体育大学紀要, 第40巻, p.33-43, 2010.
- 15) 林園子, 池田延行, 田川絵梨, 他: 中学生の日常生活におけるスポーツの機能とマネジメントに関する研究, 日本体育学会第62回大会予稿集, p.166, 2011.
- 16) 林園子: 高校生における充実した日常生活を送るための効果的な体育授業に関する研究, 法政大学スポーツ健康学研究, 第4号, P29-38, 2013
- 17) 林園子: 高校生の体育授業と運動・スポーツの意識に関する研究, 法政大学体育・スポーツ研究センター紀要, Vol31, P57-65, 2013
- 18) 益子洋人: 高校生の過剰適応傾向と、抑うつ、強迫、対人恐怖性、不登校傾向との関連—高等学校2校の調査から—, 学校メンタルヘルス, Vol12, No1, P69-76, 2009
- 19) 文部科学省: 平成22年度体力・運動能力調査報告書, 2011.
- 20) 文部科学省: 平成22年度 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査, 2011.

- 21) 文部科学省：中学校学習指導要領解説保健体育編，東山書房，p. 3 -12, 2010.
- 22) 文部科学省：中学校学習指導要領解説保健体育編，東山書房，p. 4 -12, 2010